

美德ある自由を生きましょう！

(主として、女性の人生に役立つ美德の教えとして)

---E.バークの保守主義／F.A.ハイエクの自由主義から導かれる人生哲学---

はじめに、本小論文執筆の私の意図（信念）をハイエクから引用しておきます。

政治哲学者はこの仕事（=価値判断）において多数の意志に反対することによって、もっとも民主主義の役に立つことにしばしばなるであろう。

・・・多数者が考慮に入れようと望まない事柄を考慮するよう主張し、彼らが不便かつ厄介なものとみなす原則を支持することによって、彼は自らの価値を示さなければならない。

知識人にとって単に多数者に支持されているとの理由からある信念に屈服することは、彼の固有の任務に対する裏切りばかりか民主主義それ自体の価値に対する裏切りである

F.A.Hayek

☆ 本小論では以降、著書からの引用部については、 囲いで表示することとします。

【目 次】

1. あなたの人生について考える基礎としての“自由”の本質的意味を知ろう
 - 1.1 個人的差異とその取扱い方法について
 - 1.2 個人的差異と自由の本質的意味について
2. あなたの人生目的（目標）へ向けての努力・忍耐（=美德の行為）と行為の結果に付与される（市場）価値について
 - 2.1 物質的報酬（価値）と道徳的メリット（美德）との相違について
 - 2.2 道徳的メリット（美德ある行為）の重要性について
 - 2.3 真正の自由について
 - 2.4 個人の道徳的メリットが最も評価される場所、それが《家庭・家族》の意味である
 - 2.5 異端（凶悪）思想の排除
3. あなたの人生哲学にバーク保守哲学、ハイエク自由主義哲学を据えましょう
 - 3.1 男女間に明確に存在する《差異》の重要性を謙虚に認めましょう
 - 3.2 非実在の空体語---「ジェンダー」を排除しよう
 - 3.3 男女の性差（差異）の自己認識が、あなたの良き人生の基礎である
4. あなたの人生をより良く生きるために
 - 4.1 男女の相違（差異）の承認
 - 4.2 自己愛「まず汝自身を愛すべし」
 - 4.3 結婚について
 - 4.4 親として(1)---子供の訓練と監督
 - 4.5 親として(2)---子供の基準・ルール

4.6 親として(3)---子供とのコミュニケーション

4.7 子供の「模範」としての親

4.8 夫婦円満のために(1)---受容・寛大

4.9 夫婦円満のために(2)---尊敬・称賛

4.10 夫婦円満のために(3)---協調・相互理解

4.11 夫婦円満のために(4)---感謝の心

4.12 恋愛について

4.13 女性の品格（上級編）

5. おわりに

1. あなたの人生について考える基礎としての“自由”の本質的意味を知ろう

1.1 個人的差異とその取扱い方法について

自分の人生を考えるにあたり、まず私たちは、個人の性質・能力には無限の多様性が存在し、個々人は同じではないという現実を謙虚に承認することから始めなければなりません。

人間の個人的差異について、ノーベル経済学賞を受賞し、20世紀最大の自由主義政治哲学者でもあるF・A・ハイエクは次のように述べています。

ハイエク曰く、

自由主義擁護論は個々人には甚だしい差異があることを認めているだけでなく、以下のような仮定に大きく依存している。すなわちそれは、これらの個人的差異が政府による人びとの差別的扱いを正当化するものではないと主張する。もし実際に大きな差異のある人びとに人生において等しい地位を保障すべきであるとすれば、国家は人によって取扱いに差別をつけることが必要になるが、(自由主義擁護論は)これには反対する。

(出典：『ハイエク全集 I -5「自由の条件 I」』、春秋社、P122. なお〔 〕内は著者、()内、傍点は、私〔=ブログ作成者〕が補足したものであり、以下の引用文中においてすべて同じとします。)

つまり、個人の間で顕著に存在する性質や能力の差異を我々が承認すること(=区別すること)それ自体が、私たち人間の自由の条件となっているのです。

そして、ハイエクの論旨からも自明ですが、個人の間での差異を承認すること(=区別すること)と、差異を理由にして特定の個人や集団などを差別すること(=差別的に取り扱うこと)とは正反

対の行為であり、同じことを意味しないことに注意が必要です。

また、人びとを“平等に取り扱う”とは、すべての人びとに“行為のルール体系（=法）を等しく適用する”ことを意味します。

自由主義は個人的差異を承認しながら、政府（国家）の恣意によって人びと（国民）が「差別的に扱われること」を拒否するのです。

ハイエク曰く、

法の下（前）の平等に対する要求の本質は、人びとに差異があるという事実にもかかわらず、等しく扱われるべきであるということにある。

（出典：『ハイエク全集 I -5「自由の条件 I」』、春秋社、P122）

人びとは非常に異なっているという事実からもし平等に扱うならば、その結果、実際の彼らの地位（=結果）は不平等になるに違いないということになり、そしてかれらを等しい地位（=結果）に置く唯一の方法は不平等に扱うことになるであろう。それゆえ、法の前の平等と物質的平等は異なっているばかりでなく、互いに対立する。

（出典：『ハイエク全集 I -5「自由の条件 I」』、春秋社、P124）

自由主義の日本国において、公正と正義を取り扱う司法（裁判所・裁判官等）が、“法の下での平等（=日本国憲法第十四条は、個人的差異を前提としています）”を絶対遵守すべきであり、それと物質的平等とを明確に区別しなければならない理由はここにあるのです。

1.2 個人的差異と自由の意義

個人的差異が重要なのは、それが個々人に対して異なる“価値”や“尊厳”を賦与するものだからです。

例えば、私たちは自分の優れた知性や能力（＝個人的差異）を磨くことによって、他者から受け取る「物質的（金銭的）報酬」の増大の確実性を期待できます。

また、私たちは自分の優れた人格や愛情（＝個人的差異）を鍛錬することによって、他者から“尊敬・称賛・感嘆・感謝”などの“美德の報酬（果実）”を得ることができます。

このように自由社会に住む私たちは、個人的差異の程度に応じた「物質的（金銭的）報酬」と“美德の報酬（果実）”の多様な組み合わせの中から、“自分の生きる目的”・“自分の価値”を探し出す（＝選択する）ことができるのです。

これが、私たちが“自由である”というときの“自由”の本質的な意味なのです。

2. あなたの人生目的（目標）へ向けての努力・忍耐（＝美德の行為）と行為の結果に付与される（市場）価値について

2.1 物質的報酬（価値）と道徳的メリット（美德）との相違について

自由主義（社会）あるいは自由そのものを嫌悪し、反発し、拒否する人びとは次のように主張します。

「自由主義社会では人間は利己主義・物質（金銭）主義に邁進し、人間道徳・倫理を顧みない悪人と化するのだ。すなわち、悪の根源は自由そのものである！」・・・（*1）と。

さてここで、ハイエクの【物質的（金銭的）報酬】と《道徳的メリット》という用語を導入します。

そうすると（*1）の批判は次のように表現し直すことができます。

「自由主義社会では個人の《道徳的メリット》と【物質的（金銭的）報酬】とが比例せず、【物質的（金銭的）報酬】のみが優先重視される。すなわち、悪の根源はこれを許している自由その

ものにある！」・・・(*2) と。

ハイエクの用語【物質的（金銭的）報酬】と《道徳的メリット》は何も難しい概念ではありません。日常生活の中で私たちが何となく経験したり感じたりしていることを言葉で明確にしたものにすぎません。

【物質的（金銭的）報酬】とは、人々の行為の「結果（業績）」の持つ利益に対して、他者が付与する「価値（価格）」のこと。

《道徳的メリット》とは、人々の行為（そのもの）の道徳的特性（例えば、私たちがある目的に向かって行った努力・忍耐・勤勉・勇気・・・などの称賛に値する行為の道徳的特性）の度合いのこと。

両者の関係についてハイエク曰く、

（道徳的）メリット（＝忍耐や努力の程度など）に応じる（物質的・金銭的）報酬とは、実際に評価可能なメリット、すなわち単に何らかの高位の権力（＝特定の権力者など）から見たメリットでなく、他の人びと（皆）が認識し同意することのできるメリットに応じる報酬を意味しなければならない。この意味での評価可能なメリットの前提として、一般に受け入れられている行為規則に則して（＝行為のルール^の体系＝法を遵守して）その個人が行動したことと、その行為にある程度の苦痛と努力を要したということ、（他の人びとが）確かめられることが必要である。実際にこれを確認できるかどうかは結果から判断することはできない。メリットは客観的な結果の事柄ではなく、主観的な努力の事柄である。有益な結果を達成しようとする試み（＝行為）は、大いにメリットに相応しいかもしれないが、完全な失敗（＝結果）に終わるかもしれない。しかるに完全な成功はまったく

偶然の結果であるため、メリット（＝努力や忍耐の程度）にかかわらないかもしれない。もしその人が最善を尽くしたこと（＝行為したこと）がわかると、しばしば結果とは無関係に彼が報酬を受けることをわれわれは望みたがるものである。（逆に）もし最も有益な成果（＝結果）が幸運または好都合な事情にまったく依存していることがわかるならば、われわれはその本人の功績をほとんど認めようとしなないであろう。

われわれはあらゆる場合にこの（個人の為したメリットの度合いの）区別が立てられるならば、と望むかもしれない。それができるのは行動している人の所有しているいっさいの知識、そのうちに彼の技能と自信、精神状態と感情、注意力、行動力と耐久力などを含むあらゆる知識をわれわれがもっている（＝知ることができる）場合だけである。すなわちメリットを正しく判断できるためには、自由を擁護しない主な論拠となっている条件そのものの存在（＝誰かが他者の行為の全てを把握できる状態をつくること＝誰かが他者の自由を完全に掌握・制限すること）に依存しなければならないのである。人びと（＝他者）に自分自身で決定することをまかせるのは、自らの持っていない知識を人びと（＝他者）が使うことを望むからである。しかし、われわれの持っていない能力及び事実に関する知識を人びと（＝他者）が使うに任せたいと考えるかぎり、われわれは彼ら（＝他者）の成果に関するメリットを判断する立場にない（なぜなら、われわれは、他者のメリットすべてを判断する知識を持ちえないからである）。

（出典：『ハイエク全集 I -5「自由の条件 I」』、春秋社、P134～135）

2.2 道徳的メリット（美德ある行為）の重要性について

すなわちハイエクは、自由な社会においては【物質的（金銭的）報酬】と《道徳的メリット》との間には必然的関係がない（ことが重要なのだ）と言っているのです。

しかし、誤解してはいけません。

ハイエクは「自由社会においては《道徳的メリット》と【物質的（金銭的）報酬】との間には必然的関係がないことが要諦である」と言っているだけであり、「自由社会の存立にとって《道徳的メリット（＝美德ある行為）》が必要／重要でない」などとは言っていないことに注意が必要なのです。

例えば次のように考えて見ましょう。

① お店に並ぶ商品の価格

私たちはお店で買い物をしますが、ある商品 X の価格について、それをどこの、誰が、どんな環境の下で、どんなに苦勞と努力を費やしてつくったものなのか・・・などの《道徳的メリット》の知識を駆使して商品 X の価格（価値）の妥当性を判断したりしません。そのような事情は大きな社会に住む私たちには知ることができないからです。商品 X の価値は商品そのもの（＝行為の結果）が私たちに与えてくれる利益・有用性やその他の商品とのそれとの比較において決定されるのです。すなわち、《道徳的メリット》と【物質的（金銭的）報酬】に必然的関係は存在しないのです。

② 諺「失敗は成功のもと（母）」の解釈

私たち人間には、運や偶然を完全に支配する力など与えられていません。

そうである以上、ある目的（目標）Y へ至るための私たちの努力や忍耐などの行為としての《道徳的メリット》と行為の結果としての【物質的（金銭的）報酬】の間には運や偶然が入り込むの

で必然的關係など存在しないのです。

ただし、私たちは《道徳的メリット》に運や偶然の介入する余地を極力低減させて【物質的（金銭的）報酬】に対する確実性を増大させることも全く不可能というわけではありません。

「失敗は成功のもと（母）である」と言いますが、この諺は、失敗（＝不成功の結果）の経験をもとにして、行為の仕方（＝《道徳的メリット》の在り方）における禁止則を学ぶことで、私たちが、次の行為の仕方を修正・改善し、【物質的（金銭的）報酬】（＝成功）への確実性を高めることができる、ということの意味しているものと考えられます。

③ 運・偶然まかせの「宝くじ」

しかし、全く逆のことが起る場合もあります。

例えば、毎日努力・苦勞して働き、コツコツ貯蓄（貯金）しているサラリーマンなどが、定職に就かず博打三昧の遊び人の知人から「幸運にも宝くじに當選して3億円を手に入れた」と聞けば、一時的に、妬み、嫉妬、空しさ、馬鹿馬鹿しさなどの感情に襲われるかもしれません。

しかし、こういったことも《道徳的メリット》と【物質的（金銭的）報酬】に必然的關係が存在しない自由社会では起り得ることなのだ、と承認しなければなりません。

もし承認しないならば、私たちは、宝くじをすべて廃止するか、自分に宝くじ6億円の當選の幸運が巡ってきても返上するかしなければならぬでしょう。

さらに重要なことは、「運・偶然を承認しない」となれば、宝くじだけでなく、（多かれ少なかれ運・偶然が必ず関与している）私たちの行為のすべてが否定され、私たちは自由をすべて失うことになることを理解することなのです。

また、あくまで気休めかもしれませんが、偶然3億円を当てたこの博打人の劣悪な《道徳的

メリット》は当選前後で全く変化しないでしょうから、この3億円はすぐに博打で消失してしまうというのが落ちでしょう。

④ 《道徳的メリット》で【物質的（金銭的）報酬】を決定しようとする・・・

このような社会では、ある商品 A（結果の価値）を生みだすために個人 P は有能であり 5 日間の苦勞と努力で仕上げ、個人 Q は《その分野では》P ほど有能ではないため 10 日間もの苦勞と努力で仕上げたと仮定します。

そして、個人 P は商品 A を P_p 円、個人 Q は同一の商品 A を P_q 円（ただし、 $P_p < P_q$ ）で販売したとします。私たちが、買い物に行ったときには、たいていの場合、商品 A とその値札 P_p 、 P_q ($P_p < P_q$) しか与えられません。たいていの場合、商品 A を買うのに、P、Q の《道徳的メリット》をすべて知ることなど必要ないし、そのようなことは不可能なのは自明でしょう。

私たちは同じ商品なら、価格の安い個人 P の商品 A を購入するでしょう。

繰り返しますが、もし個人の《道徳的メリット》に比例して【物質的（金銭的）報酬】が決定されなければならないとすれば、個人の能力・才能・教育・技術・努力・勤勉・・・のすべてが政府、社会あるいは特定の権力者（=誰か）によって、常に監視・監理されていなければならないことが必要条件になるということの意味するのです。

ハイエクは、実際の人間本性について、次のように述べています。

実際には、人びとは最大のメリット（=努力や苦勞）を手にすることを望むのではなく、最小の苦痛と犠牲（=メリット）によって最大の有効性（=物質的報酬）を達成すること、したがって最小のメリットを受けることをわれわれは望んでいる。

（出典：『ハイエク全集 I -5「自由の条件 I」』、春秋社、P96）

そもそも道徳的メリット（＝美德ある行為）とは主観的な努力の事柄（＝自分が自分に課す義務のこと）であって、客観的な結果（他者が判断・決定できる事柄）の事柄ではないため、両者を関連付けることは困難であるし、自分が決定すべき道徳的メリット（＝努力、勤勉、忍耐の程度の決定と方法など）について他者が決定・命令・評価したりすることは不可能であり、そのようなことは個人の自由への干渉であり、決して望ましいことではないのです。

ハイエク曰く、

平等に対する要求はある先入感によった分配の型を社会に押しつけようと望む大多数の人たちの偽りの動機であるにすぎないのである。われわれが反対するのは、それが平等の秩序であるか不平等の秩序であるかにかかわらず、ある恣意的に選択された分配の型（＝恣意的に決定された道徳的メリットのただ一つの体系）を社会に押しつけようとするあらゆる企てに対してである。事実われわれが気づくことは、平等の拡張を望んでいる人々の多くが、実際には平等を要求するのではなく、個人のメリットに関する人間的な概念にいつそう厳密に合致する分配を要求するし、またかれらの願望はよりいつそう厳格な平等主義的要求と同様に自由とは相容れない要求でもある。

（出典：『ハイエク全集 I -5「自由の条件 I」』、春秋社、P124）

2.3 真正の自由について

さてここで、真なる自由（＝ある社会・国家のすべての人びと・国民が共有できる自由）とは何か？という問題に立ち返ってみましょう。

文明社会を形成している人間である私たちが“自由である”と言うとき、それは文明以前の野生動物・野蛮人のような「無法（行為のルールなし）の放縦・放蕩」を意味するのではないことは

自明の理でしょう。

精神異常者ジャン・ジャック・ルソーの流れをくむジャコバン党のロベスピエールら、フランス革命の革命屋たちの行った放縦の（無法の）フランス国民大虐殺を、「これが、フランス人民の新しい自由である！」と熱狂して煽動する狂気の革命屋たちの姿を、ドーバー海峡の対岸から省察して、その間違いを痛烈に批判した英国の偉大な政治家、エドモンド・バークの次の言葉は世界的に有名です。

エドモンド・バーク曰く、

智恵も美德も欠いた自由とは一体何なののでしょうか。それはおよそあり得る害悪中でも最大のものです。というのもそれは、教導も抑制もされない愚行であり、狂気であるからです。美德ある自由が何たるかを知る人々ならば、無能な頭脳の徒輩がさも立派そうに聞こえる言葉（＝「じゅう」）を口にし、それを理由に自由の品位を傷つけるのは見るに堪えないことです。

（出典：エドモンド・バーク『フランス革命の省察』、みすず書房、310頁）

そしてハイエクもまたバークを継承して、文明社会の人間が享受できる真正の自由とは、“法を遵守する義務／責任を果たす自由（＝法の下での自由）”だけであることを繰り返し強調しています。

ハイエクの“法の下での自由”はバークの“美德ある自由”が前提条件となっています。

なぜなら、社会（国家）のすべての構成員（国民）が“法（伝統・慣習）”を重視し、法を遵守する義務を果たすことや、自分のした行為の結果に対する責任は、（第一義的に）自分自身が果たさねばならないという義務感が“法”の維持の基礎となりますが、それは個人が“美德を備える（＝

鍛錬する) "ことによって初めて成り立つからなのです。

ハイエクは自由社会では《道徳的メリット》と【物質的(金銭的)報酬】との間に必然的関係はないと言いましたが、自由社会における《道徳的メリット》の必要性は十分認識しており、次のように述べています。

道徳や道徳的価値は自由な環境の中でしか育たない。そのことは昔からいわれていることである。また一般的にいつて、人びとや階級の道徳基準が高いのは長いあいだ自由を享受してきたところにおいてのみであり、その基準の高さは人びとの保持する自由の度合いに比例している。また他方で自由社会がよく機能するのは、強固な道徳的信念によって自由な行動が導かれるところにおいてのみであり、したがって、自由の恩恵をすべて享受できるのは自由がすでに確立されたところにおいてのみである。このことも古くからある洞察である。これに加えて、私は次の二点を指摘しておきたい。第一に、自由がうまく機能するには強固な道徳基準が必要であるということだけではなく、ある特定の種類の道徳基準〔=個人の責任への信念〕が必要であるということ、第二に、自由社会では自由にふさわしくない道徳基準が成長する場合〔=別物である市場価値と人格評価を混同すること〕もあるということである。そのような自由にふさわしくない道徳基準が一般的なものになってしまうと、自由は破壊され、それとともに、すべての道徳的価値の基礎が破壊されてしまうことになるだろう。

(出典：『ハイエク全集Ⅱ-5「政治学論集」』、春秋社、P106、〔 〕内は同著 P109～114などを参照のこと)

2.4 個人の道徳的メリットが最も評価される場所、それが《家庭・家族》の意味である

ここまで自由と自由社会の基本原理について説明してきましたが、それでもまだ、次のような疑問と反論の声が聞こえてきます。

すなわち、

「自由社会では、個人の行為の結果（の価値）に対して【物質的（金銭的）報酬】が支払われる。つまり、自由社会とは、【結果的な】成功者（＝勝者？）のみが報われる社会だ。逆に不成功者（＝敗者？）はその《道徳的メリット（努力・忍耐・苦勞など）》にもかかわらず見捨てられる（＝物質的報酬も手に入らず、人間的・道徳的価値も認められない）非情で冷酷な社会である！」と。

しかし、このような疑問・反論は、次のような理由により《誤謬》です。

- ① 文明社会の人間は、大きな社会の中で個人がバラバラで（＝個／アトムとして）存在しているのではなく、家庭（家族）、親戚、友人（仲間）、隣保、自治会、学校、・・・、会社、・・・等々の非常に重層的で複雑な小集団（＝中間組織）の一員として存在していること。
- ② 個人が重層的で複雑な中間組織の一員であればあるほど、《道徳的メリット》と【物質的（金銭的）報酬】関連付けられる可能性が増えるだろう（＝小集団ゆえに可能性が高まるだろう）し、一度のチャレンジで成功しなくても、程度の差こそあれ、これらの中間組織網が、セーフティーネットになって個人を助けの手を差し出してくれる。自由社会においても、不成功者は決して見捨てられるわけではありません。
- ③ これらの中間組織のうち、最小単位としての《家庭（家）》の中では、すべての構成員《家族》が、家族全員の《道徳的メリット（＝努力・忍耐・苦勞・・・）》を概ねすべて知ることができるので、家族はみな、家族ひとりひとりを、【物質的（金銭的）価値】だけで評価

したりしません。他の中間組織（例えば会社内など）においても程度の差こそあれ、その構成員は個人の《道徳的メリット》をある程度までは知ることができます。

- ④ 人びとは、自分の属する中間組織の中において知ることができる範囲内で、他者の《道徳的メリット》を発見すれば、それに対して《尊敬・称賛・感嘆》などの評価《＝美徳の報酬》を表明できる自由をもっているのです。

このようにして、文明社会の人間は、大きな開かれた社会（＝社会全体）では「物質的報酬」と“美徳の報酬（果実）”の分離を暗黙の内に承認するかわりに、家族、村・町、教会・学校・会社・・・などの中間組織を（意識的あるいは無意識的に）形成して、個人の性質・能力などの差異に応じた《二つの報酬のバランス機能》を発見し、成長させてきたと言えるのです。

これをハイエクは《自由の自生的秩序：spontaneous order》と定義したのです。

このように考えれば、家庭（家族）や家庭内での家族の役割などの制度や規則は、ある時代のあつる権威ある人間が恣意的に定めたものではなく、人間が文明社会の進化の程度（歴史の経験）に応じた必要からその都度改善・改良を重ねてきた私たち現代人への遺産であると考えべきなのです。

2.5 異端（凶悪）思想の排除

ところが、短い現世の中には、社会や家族など古い制度が悪いから、全てを破壊して、新しい合理的な制度を設計し、それと取りかえれば、社会は良くなるという人々がいます。

あるいは、人類が歴史の経験から形成してきた、男らしさ／女らしさとそれぞれの役割分担を、社会的・文化的に教えられる（＝強制される）から生じるものであり、教えなければ法・伝統・慣習に縛られない「男でもない、女でもない、両性具有の新しい人間」からなる、理想社会が形成されると狂信する（＝数千年の文明社会に対し、これらは高々、数十年前に発生した狂った新

興宗教の教義に過ぎません) 人々もいます。

これらはすべて、数千年にわたる人類の経験に対する無知、過去(歴史)への不敬、自ら(の教義)を神と信じる狂気から発する「誤謬」「虚偽」に過ぎません。

私たちはこのような「新興の異端の教義」に心惑わされることなく、バークやハイエクに学び、人類の叡智(法)と美德(正しき人間道徳)を子孫に継承せねばならないのです。

3. あなたの人生哲学にバーク保守哲学、ハイエク自由主義哲学を据えましょう

3.1 男女間に明確に存在する《差異》の重要性を謙虚に認めましょう

個人的差異の存在の重要性については既に述べましたが、男女間に明確に存在する《差異(性差)》を認めることも極めて重要です。

医学(科学)の分野では、生殖器官や性ホルモンに男女間の明確な差異があるだけでなく、性染色体にも明確な差異があることがわかってきています。

そしてこれらの発見により、男女の間には胎児から幼児、児童、青年を経て大人、老人になるまで、免疫細胞や神経細胞をはじめとする細胞の一つ一つに至るまで遺伝子レベルで明確な差異が存在していることが解明されています。

例えば、1912年にノーベル生理学・医学賞受賞、アレキシス・カレルは男女の相違(差異)について次のように述べています。

アレキシス・カレル曰く、

男性と女性間に存在する相違点は、生殖器の特定な形状や子宮の存在、妊娠や教育方法によるものではない。もっと根本的な性質のものである。組織の構造そのものと、卵巣から分泌される特殊な化学物質が体全体に行きわたっていることによるのである。これら

の根本的な事実について無知であるために、女権拡張運動の推進者たちは、男女両性が同じ教育、同じ権力、同じ責任を持つべきであると信じるようになった。実際には女性は男性とは非常に異なっている。女性の体のすべての細胞一つ一つに、女性のしるしがついている。女性の諸器官、なかんずく神経組織についても、同じことが言える。生理学の法則も、天文学の法則と同様に、不動のものである。それは人間の希望によって取り換えることはできないのである。あるがままに受け容れなければならないものなのだ。女性は男性を真似ようとせず、その本来の性質に従って、その適性を発展させるべきである。文明の進歩の中で、女性の担う役割は男性のものよりも大きい。女性は、自分自身の機能を放棄してはならないのである。・・・女性が母性に背を向けるように仕向けることは馬鹿げている。若い少女に、少年と同じ訓練を知性面と肉体面で与え、かつ同じ野心を抱かせるべきではない。教育者たるものは、男性と女性における肉体的および精神的特性と、その生得的諸機能に細心の注意を払うべきである。両性の間には取り消すことのできない相違がある。文明社会を築き上げるにあたっては、これを考慮に入れることがぜひとも必要なのである。

(出典：アレキシス・カレル『人間---この未知なるもの』、三笠書房、126～129頁、訳：渡部昇一 上智大学名誉教授)

3.2 非実在の空体語---「ジェンダー」を排除しよう

性染色体 (X・Y 染色体) による男女の性差や、胎児期と生後数週間における 2 度のアンドロゲンシャワーによる脳の男性化などにより、男女の性差は生まれながらに決定しています。

これが、全世界が承認する「科学的真理 (知見)」です。

全世界が男女の性差を科学的に承認していることは、オリンピック選手が厳格な性別検査を受けねばならず、女子選手が男子競技には決して出られないルールを世界中が承認している事実からも明白なことでしょう。

ごく稀に不幸な偶然によって生じる性同一性障害などの事例はありますが、それはあくまで「例外」であり、決して《一般的真理》を相対化するものではありません。

例えば、99%の人びとに確認される一般的真理（＝科学的知見 A）に対し、科学的に確認された1%程度の例外（＝特殊ケース B）の存在を根拠にして「A は一般的真理ではない」などと言えないのは自明のことです。

男女の性差（差異）を論じるときには、「男女の性差（差異）は生まれつき存在している」という「科学的一般真理（＝事実）」を前提として始めなければなりません。

つまり、生まれながらの男女の性差（＝医学的・生物学的な性：sex）の存在の事実を前提（＝先にある）にしなければなりません。ですから、「社会的・文化的に形成された（＝強制された）という意味の性（＝gender）」なる用語は空体語でしかありません。なぜなら、いかなる形のgenderであれ、実在する医学的・生物学的な性差（sex）の基礎の上でしか形成されえないからです（＝先行してsexが存在する以上、後天的なgenderがsexから独立・無関係に形成されることを確認するのは、理論的にも実証的にも不可能だからです）。

このことについて、バーク保守哲学やハイエク自由主義政治哲学を継承する中川八洋 筑波大学名誉教授は次のように述べておられます。

ジェンダーという言葉を検証しておこう。日本のフェミニストの多くがつかうgenderという概念や用語は、主としてマネーの『Man & Woman Boy & Girl』〔1972年〕や

『Sexual Signatures [性の署名]』〔1975年〕に依拠したものである。マネーは、これらの著書で、sex と gender を次のように定義した。

sex = 「医学的・生物学的な性」

gender = 「社会的・文化的に形成された性」

しかし、余りにも杜撰な、思いつき定義である。まず第一に、このように性を二分類するのは、gender とは無縁な 99.9% 以上の人間にとっては不適當である。第二に、0.1% 以下の性同一性障害者らにとつてすら、「後天的な性」「制度や慣習によって社会的に形成された性」という意味の gender が果たして存在するかと言え、実は疑わしい。いや、そのようなことは仮説にすらならない。たとえば、女性の性器をもつが故に「女性」で生まれた子供が大人に成長するにつれ、自らの性を「男性」と認識し、そう確信していくケースにおいて、この成長過程における性の自己認識の変化は、親や学校の教育・躰によって社会的・後天的に形成された、というジェンダー論を裏付ける、いかなる科学的根拠も存在しないからである。

(出典：中川八洋／渡部昇一『教育を救う保守の哲学』、徳間書店、P138～139)

3.3 男女の性差（差異）の自己認識があなたの良き人生の基礎である

私たちが男女の性差（差異）を承認することが重要な理由は、男女の性差（差異）から生じる男性および女性の美德が、ある時代のある特定の人間（集団）によって恣意的に創り出された（定められた）ものではなく、自然の摂理と数千年におよぶ文明社会の進化と永続の必要から自生的に形成されてきた人間の叡智の集積としての制度に他ならないからなのです。

つまり、私たち現代人もまた、過去のあらゆる世代の人びとと同様に、これらの制度を利用し

て人生を歩む以外に、より良き人生を営む術を持ち得ないのです。

このことについて、中川八洋 筑波大学名誉教授曰く、

男性が「より男らしく」、女性が「より女らしく」あろうとすることによって、「より人間的」で「より文明的」な社会がつけられている

(出典：中川八洋・渡部昇一『教育を救う保守の哲学』、徳間書店、P120)

男女間の自然的・生物学的接近を基軸に発展した、男女間の恋愛と共同生活の慣習〔儀式を含む〕と制度は文明社会の重要な部分をなすものである。

(出典：同著、P130)

道徳は、言語や市場と同じく、自然発生的な制度・慣習であって、人間の智力で設計的につくられたのではない。そして、人間は道徳律に従って生きる方が、道徳的に違背して生きるより、より自由を享受でき、より高貴な品格を維持できることを、祖先の叡智の堆積の中から学んだのである。「道徳のもとの自由〔freedom〕」であり、「道徳のもとの品格〔character〕」である。「美徳ある自由」「美徳ある品格」といってもよいだろう。

そもそも人間は、伝統や慣習あるいはしきたりという羅針盤なしには、その人生を充実したものにすることができない。いかなる人間も、生きる価値や意義を、伝統・慣習・しきたりの土壌から得るのである。そして、道徳とはこの伝統・慣習・しきたりに生命を得ている最も美しい華であるように、道徳の拒絶や道徳の逃避は、しばしば伝統・慣習・しきたりから自らを切断してしまう。その場合、(人間は) 必然的に社会〔世間〕に浮遊する「根無草人間」「無規範人間」となる。自己喪失が生じるのである。ニスベットはいう、

「揺るぎない歴史的道徳からの人間の疎外は、実に、人間の仲間からの疎外の所産にほ

かならない」〔注 11〕

〔注 11：ニスベット『共同体の探求』、梓出版社、12 頁〕

そして疎外が深くなればなるほど、孤独と不安の感情から人格は自己破壊の病に蝕まれていくしかない。また、道徳からの逃避は伝統と慣習がつくってくれている信号機を見ないことでもあるが、その結果として、正邪や善悪そして正義・不正義の境界線がぼやけてくる。このとき、個〔アトム〕となっている個人は飢餓とか疫病に対する前近代の“恐怖”とは異次元だが、己の生が空虚かつ無意味であることの、やはり“恐怖”のるつぼに落ちる悲劇に遭遇する。無道徳や悖徳を選択した個人を待ち受ける未来の人生は、救済が閉ざされた不幸だけである。

道徳、それはバークやトックヴィルそしてハイエクらが指摘する、“真正の自由”に不可欠なものだけではない。このように人間の生における、疎外を回避し、孤独と不安という恐怖を確実に退散させてくれる、羅針盤的な特效薬である。人生においていつ訪れるかわからない不幸を未然に防止し最小化してくれる、信号機である。

（出典：同著、P154～156）

4. あなたの人生をより良く生きるために

〔 マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』
サミュエル・スマイルズ『品性論』 〕 より

4.1 男女の相違（差異）の承認

女性は、男性というあの不思議な、だがすばらしい種族とは、非常に異なる考えかたを

します。しばしば男性とコミュニケーションをはかろうとしますと、私たち（女性）はまったく違う前提から出発していることに気づきます。男性が妻に話しかけるのは、自分の**考え**や**知識**を**表明**するためです。女性の方は、**感覚**とか**感情**について話したがります。・・・女性は**言葉**で**愛**を表現し、言葉でそれを**返してもらう**ことを**期待**します。男性は**行動**で**愛情**を表現します・・・彼女は**言葉**や**優しさ**を望みます。彼は彼女に**物質的幸福**を与えます。両性がときおりコミュニケーションに困難をきたすのも無理はありません。**理解する心**を持った女性は、おおいに必要とされています。

（出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P175～176）

母親の支配する家庭で育った男性が正常な**結婚**をする可能性は、ごくわずかです。かりに結婚したとしても、彼の見つける相手は、たいがい母親のように彼を支配する女性です。この根深くしみついたパターンの生み出すものは、支配的な母親と、受動的な父親という女家長制社会です。

こういう家庭では、女の子もまた影響を受けます。いつもそばにいて可愛がってくれるパパ、彼女の描いた絵を見たり、お話を聞いてくれたりするパパがいないと、彼女はそれを自分個人への嫌悪ととります。この嫌われているという感情を、彼女は表にはあらわさないかもしれませんが、成人した後に、父親への恨みを他の男性に、夫も含む男性全般に向けかえるのです。

（出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P198）

“私（男性）の愛情を勝ち取るものは、女性の**優しさ**であり、外観ではない。”

——シェイクスピア

“夫（男性）には**智恵**があり、妻（女性）には**優しさ**がある”

——ジョージ・ハーバート

（出典：Samuel Smiles, “Character”, chapterXI）

能力の尺度に関して男女は一对で同等であっても、**同じではない**。男性は女性より力強く、筋骨隆々としていて、本質的に乱暴な性質である。女性は男性より繊細で、感性豊かで、気弱な性質である。男性は**知力**において優れており、女性は**愛情**の資質において優れている。人を**指導**するのは**知力**であるが、人の心を**感化**するのは**愛情**である。両方の性質が、人生で果すべき男女それぞれ役割に、等しく順応しているのである。

・・・稀に、男性が女性的であったり女性が男性的であったりすることがあるが、これらは**例外**であり、男女間の一般規則の存在を証明するものにすぎない。

（出典：Samuel Smiles, “Character”, chapterXI）

4.2 自己愛「まず汝自身を愛すべし」

イエスは言いました。「・・・**己のごとく汝の隣り**（隣人）を**愛す**べし」。もしあなたが自分を愛していなければ、ほかの人を愛することもできません。何も与えるものがないからです。その上、あなたが自分を愛していないなら、ご主人だって心からあなたを愛することはできないでしょう。・・・自分を愛するというと、自己本位なことのように聞こえるかもしれませんが、けれども、もしあなたがご主人をも含めて他者を愛そうと思うなら、これはぜひとも必要なことなのです。・・・あなたが自分自身を理解し、受け容れ、愛するようになってはじめて、あなたは**自由にあなた自身**となることができます。シェイクス

ピアは言いました---

「とりわけ大事なことは、

自分に**忠実**であること、

そうすればあとは夜が日につづくごとく、

おのずから**他人**にたいしても、

忠実たらざるを得なくなる」 ---ハムレット一幕三場。

(**出典**：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P53～55)

4.3 結婚について

すばらしい**結婚**とは、申し分のない人間を見つけることよりも、申し分のない人間になることで築かれるものです。私の知り合いの**女性**の大半は、自分の**妻**として、**母**としての**役割**を向上させたいと願っています。それは主として彼女たちの**すること**とかかわりがあります。それに対し、**女性**としての役割は、彼女たちがどんな人間であるかであって、それは基本的な問題とかかわってくるのです。・・・**内部装飾**、つまりあなたのとる態度に関して**内面を磨く**ことは、ちょっとした手間仕事です。けれども、その結果は、払った**努力**にじゅうぶん値するでしょう。

(**出典**：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P47)

結婚に失望する人がいる。その理由は彼らが結婚に多くを期待しすぎるからである。けれどもそれ以上に、彼らが上機嫌、親切、寛容および良識を共有する夫婦関係に至らないからである。おそらく彼らは結婚をこのような失望の場合に経験するのではない状態、至

高の幸福として想像していただろう。そして実生活に困難と苦勞が伴ってくると突然夢から覚めるのである。また彼らは、選ばれた自分の結婚相手に何か完璧に近いものを期待し、実生活の経験によって、結婚の最も美しい特質は弱々しいものだ気付くのである。しかし他者の心に最も強く**寛容**と**同情**を要求させるのは、人間本性の完全性よりはむしろ**不完全性**そのものであることが多いのである。そして**愛情**と**思慮**があるほど、親密な結婚生活を創り出しやすいのである。

(出典 : Samuel Smiles, "Character", chapter XI)

賢明でない人は、たいてい美しさを求めて結婚する。最初、それは強い魅力を発揮するが後になれば比較的小さな重要性しか持たないと分かるものである。身体の美しさは過小評価されるべきではない、というのも、もし他の事柄が同じだとすれば、体形の良さや美貌は健康の外面的現われだからである。しかし、美しい外形であるが心に品性のない者、美しい容貌であるが心に感傷や優しい気質のない者と結婚すれば最も惨めな失敗となる。最もすてきな風景でさえ、毎日眺めていると単調に思えてくるように、最も美しい容貌もそれを通じて輝く美しい性格を持たないならば同じことになる。今日の美貌は明日にはありきたりのものとなるが、最も平凡な容貌を通じて示される**善良な性格**は、長く愛されるものである。

(出典 : Samuel Smiles, "Character", chapter XI)

4.4 親として(1)---子供の訓練と監督

子供の成長にしたがって、彼の処理できるだけの**責任**をためらわずに与えておきましょう

う。とはいえ、彼はまだ**子供**であってあなた（=親）のように問題を処理できないというのを忘れてはいけません。それが身につくまでには、何年かの**訓練**と**監督**が必要ですが、そのためにこそあなたの存在が重要なのです。彼がある責任を担えるようになるまで辛抱強く**手助け**し、それができるようになったら、またすこし責任を分ち与えましょう。

（出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P221）

子供の性格が形づくられるときに母親の影響を受けることはよく知られている。母親は子供の生活の中に**道徳的な雰囲気**をつくり出す。そうすることで子供の**知性**と**感情**が育つのである。それは子供の身体が自然の大気を吸って養われるのと同じことである。女性は、子供が幼児期のときには天性の**養育者**であり、児童のときは**教育者**である。さらに女性は、子供の青年期には**案内者**や**相談役**となり、子供が大人になればと**友人**となり**伴侶**となる。つまり、**女性**は**母**、**姉**、**恋人**、**妻**という**多様な関係**で**男性**に接するのである。

（出典：Samuel Smiles, "Character", chapter XI）

4.5 親として(2)---子供の基準・ルール

非行少年の研究によると、幼年期になんの**規律**も課せられずに育った子供は、大人になってから、**思慮深い**、**一貫した態度**で己を持することができなくなる傾向があります。自分が愛されていない、疎外されていると感じて、欲求不満におちいるからです。

規律とは、子供の**躰（しつけ）**です。規律はしばしば“お仕置き”と同一視されますが、ほんとうの規律とは、積極的な**訓練**であり、親が子供に**しかる**ということだけでなく、子供を**導く**ことを指します。この訓練には、二つの基本的な手順があります。**愛情**を持って**限**

界を定めること、その**枠**が破られたときに、愛情をもってそれを**矯正**することです。枠を定めたり、何かを**禁じる**ことを恐れる親、臆に積極的でない親は、そこから脱けだす道を何一つ子供に教えずに、人生というもつれた藪に追い込むようなものです。・・・何をしてもよく、何をしてはいけないかの限界を知らされれば、子供は**安心**こそすれ、恨みはしません。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P218～P219)

4.6 親として(3)---子供とのコミュニケーション

すべての**コミュニケーション**の正しい目標は、両者の合意ではなく、**相互理解**です。理解するとは、他者の見地からものを見て、なぜそう行動するのかを知ることです。あなたの子供を理解するには、コミュニケーションの橋はあなた（=親）のほうから架けられなければなりません。しばしばそれは話すよりもむしろ**耳を傾けること**を意味します。あなたの子供は、もしあなたが自分を愛してくれているなら、自分の話喜んで耳を傾けてくれるはずだと思っています。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P213)

4.7 子供の「模範」としての親

人生とはときに苦しいものであり、失望に満ちています。ですがそれは、子供にとっても、楽しみや遊びばかりに満ちたものではないのです。子供は複雑な、**道徳**とは無縁な社会に住んでいて、それは独特の重圧、子供のまだ経験したことのない重圧を、彼の鼻先に

つきつけてきます。彼は十歳以前から十代にかけて、その年代をのりきるための**ロード・マップ**を必要としています。いよいよ巣を飛び立つときが来たときに、**自信**をもって迷わず飛び立てるようにです。彼はそのロード・マップをあなた（=親）に求めています。あなたを彼（=子供）は見まもっています。あなたの**価値観**、**態度**、**行動**を見まもり、それを自分も採用するに値するかどうか見ているのです。子供の遊び相手になり、**家族の伝統**の一部を担うよう**励ます**ことによって、あなたは自然に子供の自信を育てているのです。親子がつねに**仲睦まじく**まじわり、遊びや楽しみを**ともにして**きたならば、子供はきっとあなたの**生き方を見習おう**とするようになるでしょう。

（出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P204～205）

4.8 夫婦円満のために(1)---受容・寛大

トータル・ウーマンは、**家庭を男性の安息所**、彼がいつでも**逃げ込める場所**にします。**無条件**に相手を受け入れるというお金では買えない贅沢を、彼女は男性に**与える**のです。・・・ご主人を受け入れることは、彼を**生かす**ことへの第一歩です。これは効果てきめんです。それは彼を**解放**して、完全なる男性〔トータル・マン〕への道をひらきます。彼はそのための潜在能力をもっているのですが、あなたが彼に本来の力を発揮させない限り、それを成就できないのです。彼を受け入れましょう。現在の**あるがまま**の彼を。彼の**長所も短所もすべて**受け入れるのです。「・・・良きときも悪しきときも、富めるときも貧しきときも、病めるときも穏やかなるときも・・・今日より**永遠**に」。

（出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P70、72）

愛は決して要求しません。愛とは、彼や彼の気持ちを**無条件に受け入れる**ことです。彼には**家庭**内に競争者など必要ありません。一歩家を出れば、七人の敵がいるのですから、(家庭で)彼の求めているのは、**伴侶**としての**あなた**であり、あなたの**励まし**なのです。円熟した**夫婦**は、決して完全を求めません。結局は幻滅におわるだけの誤った目標など追いかけません。彼らはただ、おたがいのために**協力**しようとしているだけであり、それがひいては**幸福**な性の**一致**を生み出すのです。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P167)

怒りに対処する最終的なステップはご主人を**許し**、そして一切を忘れ去るということです。**許す**ということは、素晴らしい**結婚**に**必須**のものです。G・K・チェスタートンは言いました。「許すとは、ならぬ(できぬ)**堪忍**をすることである。そうでなければ、それは**美德**でもなんでもない」・・・女性の中には、困った記憶力を持った人がいます---何事も決して忘れないのです。許すことは忘れ去ることを意味します。一切を白紙に戻すということです。人を許せない女性は、おそらく、身体の疲労と心の疲れに悩むことになるでしょう。遺恨を持ち続けるということは、多大のエネルギーを必要とするものです。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P192~193)

男性の性質はより多く**知性**に属し、女性の性質はより多く**愛情**に属しているが、男性の愛情が知性と同様に、女性の知性が愛情と**同様に養われるべき**ことが**必要不可欠**である。愛情のない男性は文明社会には不適當である。愚かで知性のない女性も同様である。徳性と知性の全部を養成することが健全でバランスの良い品格の男女を育てるのに不可欠である。他者に対する同情や思いやりを持たない男性は、粗悪で、成長不良で、下劣な、利己

的人間にすぎないだろう。同様に、洗練された知性を持たないならば、最も美しい女性でさえ身なりの良い人形同然であろう。教養ある知性を持たないならば、最も美しい女性でさえ、立派な衣裳を着た人形同然と言うべきだろう。

(出典：Samuel Smiles, “Character”, chapter XI)

4.9 夫婦円満のために(2)---尊敬・称賛

男性のもっとも基本的な**欲求**は、情熱的な性愛を除けば、**認められることと賞められること**だといいます。**女性**は**愛されること**を望み、男性は**称賛されること**を望むのです。私たち**女性**は、**私たちと異性**とのあいだのこの**重要な相違**を忘れてはなりません。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P73)

夫を愛し、敬えと聖書には書いてあります。これは夫を**尊敬**するということです。・・・女性として、あなたは夫に愛されたいと望んでいる、・・・彼のほうは、男性として、**称賛**されることを望んでいるのです。このことは、女性が男性にない力を持っているのだとわかるまでは、一部の女性をいらだたせるかもしれません。ですが、純粹に与えるためにだけ与えるということは、**あなた** (=女性) の**天性**なのです。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P75)

《トータル・ウーマン》のクラスに出ているうちに、この女性は、自分が力を持っていることに気づきました。彼の**必要**としている**称賛**を注いでやる力を、です。彼女はご主人を称賛するようになり、二人の仲は変りはじめました。ある夜彼は妻に言いました。「何か**素晴らしいこと**が起こりかけている。それが何だかわからないが、**素晴らしいこと**だよ。」

君がなぜだか生き生きして見えるんだ」。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P76)

4.10 夫婦円満のために---協調・相互理解

男性と女性は、身分は**対等**でも、果たす**機能が違います**。**神は男性を一家の長**たるべく定められました。いわば社長です。そして**妻**は、経営権を持った副社長です。どんな組織にも首長はいるもので、**家庭**もその例外ではありません。この**きまり**を変えたり、改めたりする手立てはありません。ときに、一家がこれを覆そうとして、女性を長に選ぶことがあります。ですが、この**秩序**を逆にすると、家庭はうまくおさまりません。この方式はたいがい短期間のうちに破綻してしまいます。ご主人を一家の長にしてあげることこそ、上手な経営戦略なのです。私は時々訊かれます。こうして何でも夫のやり方に合わせるといふことは、妻と夫を奴隷対主人の関係に置くものではないか、と。トータル・ウーマンは奴隷ではありません。彼女は、たとえ内心ではそうしたくないときでも、**にこやかに**夫のやり方に**合わせます**。・・・**結婚**はまた、**君主国**にもたとえられます。**夫が王さま**で、**妻が女王さま**です。**王家**では王さまの判断は、それが国家に対するものであれ、女王に対するものであれ、**決定的な力**を持ちます。でも、**女王**は決して彼の奴隷ではありません。彼女なりの力を持っているからです。**彼女は女王**です。彼女もまた**王座**にいて、国を**統べている**のです。彼女には自己の考えを明らかにする**権利**があり、じつのところ、その**責任**すらあります。ただし言うまでもなく、**女王らしい**やり方で、ですが。王さまは彼女の判断をおおいに**信頼**していますが、もしも意見がくいちがった場合、最終的な決断を下すのは**王**

さまです。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P91～92)

家庭とは女性の王国、国家、世界である---彼女は愛情、思いやり、穏やかさという力によってそこを統治する。気品ある女性と人生を共にすることほど荒々しい男性の気質を落ち着かせるものはない。彼は安らぎ、満足および幸福---すなわち知性の休息と心の平穩---を家庭に見出すのである。

(出典：Samuel Smiles, "Character", chapter XI)

互いに心を打ち明け、打ち明けられるところまで、深く他人の話に耳を傾けることは、おそらく、人間が他人に対してなせる最大の奉仕であろう・・・コミュニケーションとは押しつけではなく、分かち合うことです。それが成立するには、話すことと聞くことの両方が必要であり、また、少なくとも二人の人間、話し手と聞き手が必要です。どちらも結婚には必要不可欠です。あなたの考えを伝えるには、話さなくてはなりません、同時に、ご主人が考えを表明するときには、それに耳を傾けなくてはなりません。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P179)

もっぱら職業の事柄のみに従事する人生を送れば、人間の品性は狭く頑固なものになりがちである。そのような人生は、主として、自己利益を注視することと他者の側の詐欺商法に対して自己利益を保護すること一杯となる。こうして知らず知らずのうちにその人の品性は疑い深く、けちなものになっていく。このような（職業が人生に及ぼす）影響に対する最良の矯正手段は、常に家庭の中に存在しているのである。その手段とは、利益一辺倒の思考から心を退かせ、日々の決まり仕事から心を切り離し、元氣回復と休息のために

家という**聖域**に心を連れ戻すことである。

「苦勞の多き人の心を照らす、真なる至高の光は、**一家の歡喜の声**である」

(出典：Samuel Smiles, “Character”, chapterXI)

4.11 夫婦円満のために(4)---感謝の心

世の夫たちもまた、深く傷ついています。ある男性はわたしに言いました。「時代のせいかもしれませんが、どうもこの頃は、だれもが**感謝**をしなくなった。うちの**女房**なんかその最たるものだよ。彼女に何かしてやっても、ちっとも楽しくなんかありゃしない。彼女が**恩義**を感じないってのがそのおもな理由さ」。夫に**感謝**しない妻は、少しも夫に**喜び**を与えません。にもかかわらず、世の大勢の妻たちが、甚だしい忘恩という罪を犯しているようです。彼女たちは、「**ありがとう**」という簡単な言葉さえ忘れてしまっています。そしてその言葉の暗示する**行為**や**感情**も。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P107)

内面から湧き出てくる**感謝**は、外面的な方法---つまり、**言葉**や、**態度**や、**行為**や、あるいはこの**三つすべて**によって伝えられなければなりません。**心**から**感謝**を表明したければ、これはたやすいことです。感謝に溢れているなら、とても黙ってははいられませんから。あなたの“**権利**”とやらに、**感謝する心**を忘れさせてはいけません。

(出典：マラベル・モーガン『トータル・ウーマン』、講談社文庫、P110~111)

4.12 恋愛について

恋愛は、その用語の一般的意味において、愚かなことと言われてきた。しかし、**純粹な恋愛**、**高潔な恋愛**、**利己的でない恋愛**は、人間の**道徳的卓越の結果**であるのみならず、その**存在の証明**でもある。**道徳的な美**に対する感受性、そこから生じる感嘆により**利己心を忘れる**ことは、すべて恋愛が**高度の道徳的感化**を要求している証拠なのである。(真の) **恋愛**は、人間本性の利己的部分に対する、利他的部分の勝利を意味するのである。

・・・**恋愛**は、後方を照らす光によって現在を**賛美**し、前方を照らす光によって**未来を明るく**する。(他者への) **尊敬と称賛**の結果としての**恋愛**には、人間の品性を**高尚**にして**浄化**する作用がある。恋愛は人間を利己心に対する隷従から**解放**するのである。

・・・男女の真の一致は、**知性と愛情**の一致が必要であり、相互の**尊敬と愛情**に基づく**一致**が必要である。フュヒテは言った、「真の永続する恋愛は、相手への**尊敬の念**なしには存在し得ない。その他のあらゆる恋愛は、のちに後悔することになる。そのような恋愛には、いかなる高貴な人間精神の価値もない」と。実際には人間は悪人を愛することなどで、常に自分が**尊重し**、**尊敬し**、**称賛**できる何かを愛するのである。

(出典 : Samuel Smiles, "Character", chapter XI)

4.13 女性の品格 (上級編)

パークは自分の妻について次のように述べた。

「彼女は魅力的であるが、それは容貌、顔色あるいは輪郭の美しさが原因なのではない。彼女は三つの特徴をすべて高度に備えているが、人びとが彼女に感動するのはこれらのせいではない。彼女の美を形成するものは、彼女の顔の**表情**に現われる**気性**、**仁愛**、**純潔**お

よび**感受性**というすべての美しさなのである。彼女は一目見ただけで注目を惹く美貌である。その美貌は見る見る人びとの関心を募らせていき、美貌が注目を惹くのは最初だけということに気づくのである。」

「彼女の眼差しは**穏やかな光**を放っているが、時には**畏怖の念**を抱かせる。彼女の**眼差し**は、公職と無縁の善人のように、権力ではなく**美德**によって、**そうさせる**のである。」

「彼女の**名声**は高くない。彼女はあらゆる人びとの**称賛**の的として存在するのではなく、**一人の夫の幸福のため**に存在しているのである。」

「彼女は**堅固な意思**をもっているが、それらはすべて**繊細さ**を欠くものではない。彼女は**柔軟な考え**をもっているが、それらはすべて弱さを示すものではない。」

「彼女の**声**は心地よい静かな**音楽**である---その音楽は公衆の集会を牛耳るためではなく、群集から区別される仲間の集団を魅惑するようにできており、それが彼女の声の優れた点である---だから、人びとはその声を聴きに彼女の下に集まるのである。」

「彼女の**行動**とは彼女の**心の表現**であり、一方は他方の**複写物**にすぎない。彼女の**知性**は、それ自身が影響を及ぼす様々な出来事（結果）の中に現われるのではなく、彼女が**する選択の良さ**の中に現われる。」

「彼女は人目を引く言動をして知性を示すのではなく、**してはならない言動を避けること**で**知性**（賢さ）を**示す**のである。」

「彼女ほど大変若くしながら世間の事情を良く知っている者はいないが、彼女はその知識があるからといって決して墮落しているわけでもないのである。」

「彼女の**礼儀正しさ**は、その対象者に対するいかなる判断からも導かれるのではなく、

彼女の**天性の義務感**に導かれている。それゆえ、正しい作法を理解している人びともそうでない人びとも、必ず彼女に心打たれるのである。」

(出典 : Samuel Smiles, “Character”, chapter XI)

5. おわりに

さあ、今日からあなたも、美德ある自由を生きましよう！

平成 26 年 3 月 20 日 (木)

兵庫県神戸市にて記す

by バークを信奉する保守主義者



あなたが人生哲学を持つために参考になるだろう、私の関連論文を紹介しておきます。

もし、興味があればお読みください。

1. 人生とは努力次第で何歳からでも再出発できる → [『美德冊子「さあ、自助の精神を取り戻そう!』』](#)

2. バーク/ヒューム/ハイエクの政治哲学について → [真正の保守主義とは何か？](#)